北房町埋蔵文化財発掘調査報告５

備中平遺跡

１９８６年3月

北　房　町　教　育　委　員　会

序

備中川を中心に広がる平野と温暖な気候に恵まれた我が北房町には古くから人が住まい、生活が営まれてきました。あちこちの丘陵の裾に残された古墳等の遺跡は二百数十を数えます。まさに備北の要衝として古くから政治、経済、文化が栄えてきたあかし、町民の誇りであり貴重な文化遺産を保存すべきであります。

この度、大字山田地区では17.5haに及ぶ広範囲な圃場整備が計画されましたが、この地域は縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが周知されています。このため北房町教育委員会として調査体制を組み、昭和59年度で発掘調査を実施しました。土地基盤整備の時代的な要請と文化遺産の保存との目的を全うすることができたことは誠に喜ばしいことであります。この報告書は発掘した遺跡の総まとめであり、これが文化財の保存に代わり、また歴史探求の資となるならば幸甚に存じます。

おわりに、終始本調査事業を御指導御援助下さった、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センターをはじめ、岡山県高梁地方振興局、北房町役場建設課、地元地権者等関係各位の御支援並びに寒風雨雪に耐え発掘作業に取り組まれた作業員の御苦労に対し、深甚の敬意と謝意を表します。

昭和61年３月

北房町教育委員会

教育長　加　戸　　明

例　　言

1．本書は北房町教育委員会が昭和59年度国庫補助事業を受けて実施した「備中平遺跡」の発掘調査の概要報告書である。

2．遺跡は上房郡北房町山田に所在する。

3．発掘調査は教育委員会職員岩崎仁司が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和59年9月10日から昭和60年2月18日まで実施した。

4．遺物の整理は坂本光代の協力で岩崎が行った。

5．本報告書の執筆・編集は岩崎が行った。報告書作成にあたっては坂本光代、植田靖子の協力を得た。

6．本書に使用したレベルの数値は海抜高である。方位は磁北である。

7．本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25000分の1地形図（呰部、刑部、勝山、井倉）を複製・縮小したものである。

8．発掘調査で出土した遺物、及び実測図・写真類は、すべて北房町教育委員会に保管している。

9．本書第23図14埴輪実測図は、岡山県古代吉備文化財センターの提供による。

目　　次

序
例言
目次 …… 1
第1章　地理的・歴史的環境 …… 3
第2章　調査の経緯・経過 …… 6
第3章　発掘調査の概要 …… 9
　第1節　遺跡の位置と現状 …… 9
　第2節　調査の方法と概要 …… 11
　　A調査区 …… 11
　　B調査区 …… 12
　　C調査区 …… 14
　　D調査区 …… 19
　　E調査区 …… 19
　　F調査区 …… 24
　　G調査区 …… 24
第4章　まとめ …… 26

図　目　次

第1図　遺跡位置図 …… 3
第2図　北房町内主要遺跡図（1/75000） …… 4
第3図　備中平遺跡周辺遺跡図（1/25000） …… 9
第4図　調査地点位置図（1/4000） …… 10
第5図　A調査区全体図（1/150） …… 11
第6図　A調査区谷状遺構出土遺物（1/4） …… 12
第7図　B調査区全体図（1/300） …… 13
第8図　B調査区斜面堆積出土遺物（1/4） …… 14
第9図　C調査区全体図（1/200） …… 15
第10図　建物1（1/80） …… 17
第11図　建物2（1/80） …… 17
第12図　建物3（1/80） …… 17

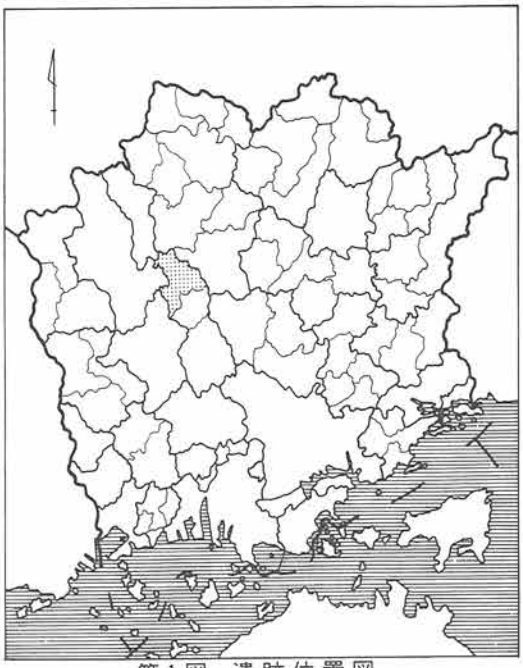
第13図　建物４（1/80）……18
第14図　建物５（1/80）……18
第15図　土壙１（1/40）……18
第16図　Ｄ調査区全体図（1/300）……19
第17図　Ｅ調査区全体図（1/300）……20
第18図　建物（1/80）……21
第19図　土壙墓１（1/40）……22
第20図　土壙墓２（1/30）……22
第21図　土壙墓３（1/30）……22
第22図　土壙４（1/80）……22
第23図　Ｅ調査区出土遺物（1/4、1/1）……23
第24図　Ｆ調査区全体図（1/300）……24
第25図　建物（1/80）……24
第26図　Ｇ調査区全体図（1/400）……25

図　版　目　次

図版１　備中平遺跡航空写真
図版２　１．Ａ調査区谷状遺構（北より）
　　２．Ｂ調査区全景（南より）
図版３　１．Ｃ調査区全景（北より）
　　２．建物１（南より）
図版４　１．Ｃ調査区建物４（南より）
　　２．Ｅ調査区調査前全景（北より）
図版５　１．Ｅ調査区全景（東より）
　　２．Ｅ調査区土壙墓２
図版６　１．Ｅ調査区土壙墓３
　　２．Ｅ調査区五輪塔集積地
図版７　１．Ａ調査区調査風景
　　２．Ｅ調査区遺構掘り下げ状況
図版８　出土遺物

第１章　地理的・歴史的環境

備中平遺跡は、岡山県中北部にある上房郡北房町山田に所在する。付近一帯は石灰岩地帯で、北房町から新見市にかけては石灰岩の採掘場が多く見られる。また、カルスト地形が各所に見られるとともに、洞穴・岩陰が散在する。このような岩陰の一つに縄文式土器の採集された地蔵ケ渕遺跡（注１）がある。

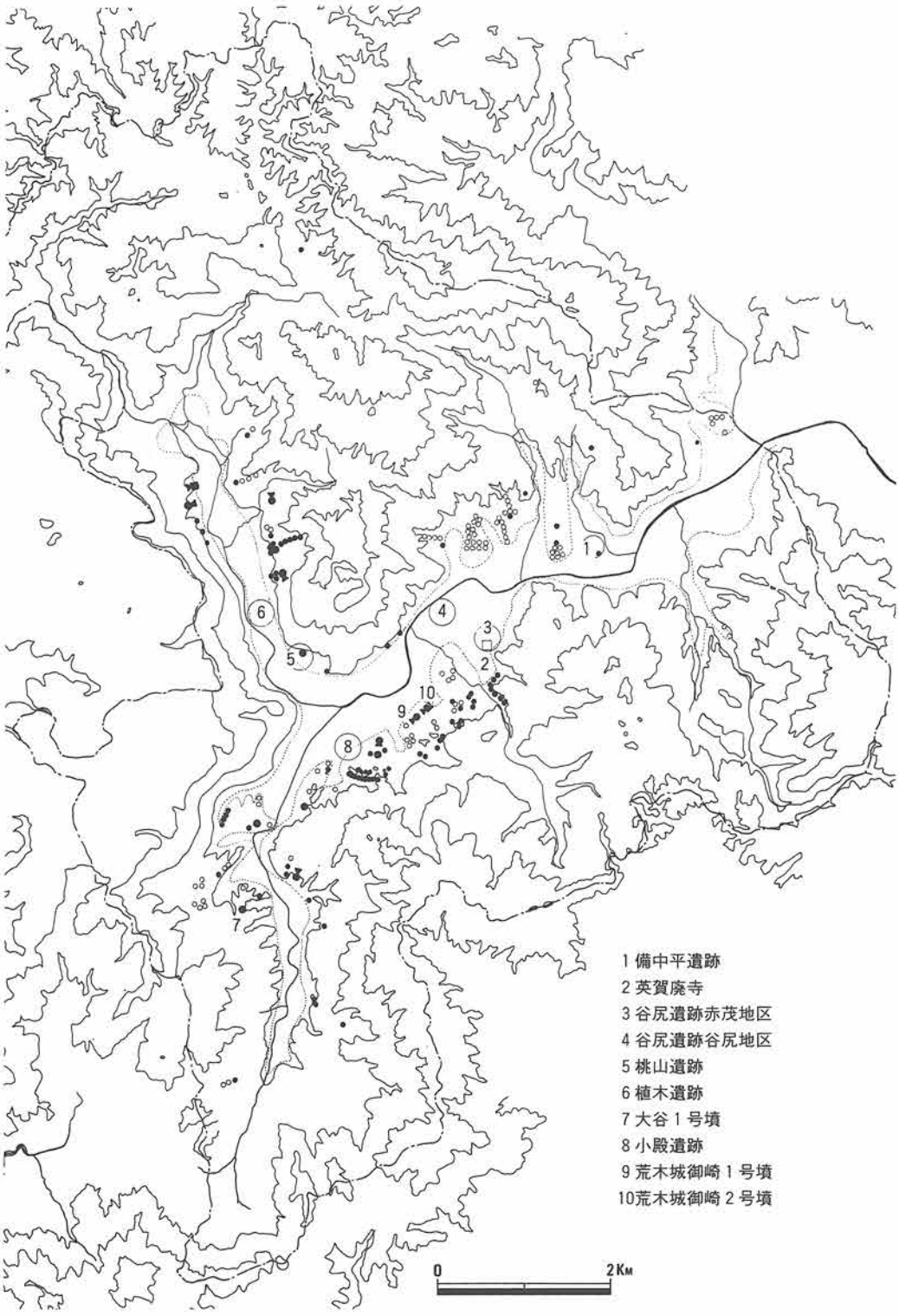


第１図　遺跡位置図

この石灰岩地帯の間を旭川の一支流である備中川が流走しており、北房町内においては、呰部を中心とする地域と上水田を中心とする地域に一定の広さとまとまりをもった平地が形成されている。さらに、備中川の支流である中津井川により開析された地域とを合わせた地域が、この一帯の中心地を形成しており、当町内で現在までに知られている遺跡も、その大多数がこの周辺に存在している。

北房町内において現時点で最古の遺物は、中国縦貫自動車道路建設に伴って発掘調査された谷尻遺跡谷尻地区（以後、谷尻地区と略す）（注２）、備中平遺跡（注３）、空古墳盛土内（注４）において検出された山形及び楕円の押型文土器であり、縄文時代早期まで遡ることができる。以後、後期までは遺構遺物は希薄である。これに対し、縄文時代晩期になると遺物の出土量が急増する。谷尻地区では爪形文を主体にする土器をもつ土壙や、堆積土中から多くの遺物を出土している（注５）。縄文時代晩期に続く弥生時代前期の遺跡は現在のところ僅かに谷尻地区において数片の土器が出土しているだけであり、遺跡の広がりは確認されていない。後期になると、谷尻地区において60数基の土壙墓や、竪穴住居址が多数検出されたほか、町内各地の低丘陵上に散布地が広がっている。また、祭祀遺跡として知られる矢の内遺跡では、多数の丹塗りの土器が出土している。

古墳時代に入ると集落の数はさらにふえるとともに、丘陵上には数多くの古墳が存在している。中でも、北房町内で最も広い沖積地を有する上水田の南の丘陵上には町内で最も古い時期と考えられる荒木城御崎１号墳をはじめ、同２号墳、立古墳、下村古墳などの大型前方後円（方）墳が系列的につくられる。以後、上水田及び呰部、中津井の３地域を中心として古墳群が展開されるとともに唐尺使用を思わせる切石積石室をもつ大谷１号墳（注６）など注目すべ



第 2 図　北房町内主要遺跡図（1/75000）

き古墳が点在する。

歴史時代の遺跡としては法起寺式または観世音寺式の伽藍配置と考えられる白鳳時代創建の英賀廃寺（注７）があり、この廃寺の南西約２㎞には郡衙に推定される小殿遺跡（注８）が所在し、谷尻地区でも建物が検出されている。

中世に入ると備中平遺跡のほか、谷尻遺跡で多くの建物群、そして植木遺跡(注９)では掘切りをもつ城館が検出されている。これらの遺跡の背後の山々の頂には山城がこの平野を見下ろす様に築かれている。このように、水田一帯は、古墳時代～中世にかけて英賀郡の中心として一大発展をとげた地域である。

注１　北房町川崎地蔵ヶ渕洞穴入口で突帯文土器が採集されている。

注２　高畑知功、山磨康平、井上弘他　「谷尻遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976年

注３　田仲満雄、井上弘　「備中平遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　12　岡山県教育委員会　1976年

注４　田仲満雄　「空古墳」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　11　岡山県教育委員会　1976年

注５　注２に同じ

注６　伊藤晃　「大谷３号墳発掘調査報告」　付載　『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』１　北房町教育委員会　1975年３月

注７　平井勝　「英賀廃寺」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　38　岡山県教育委員会　1980年

注８　平井勝　「小殿遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　38　岡山県教育委員会　1980年

注９　田仲満雄　「植木古墳」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　11　岡山県教育委員会　1976年

本章は、森田友子、岩崎仁司　「谷尻遺跡赤茂地区」　『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』4　北房町教育委員会　1982年の第２章を加筆したものである。

第２章　調査の経緯・経過

備中平遺跡は中国縦貫自動車道路建設に伴い昭和47年にその一部が発掘調査され、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。その後北房町は、この遺跡が所在する山田地区一帯の圃場整備計画をたてた。このため遺跡の規模・時代等を明らかにして保護・保存を講ずるため、昭和57年度に確認調査を行った。これをもとに協議した結果、盛土工法により保存するが、設計・工法上無理の生じる1200㎡について発掘調査を行うこととした。しかし、地元より再三にわたり調査面積増加の要望があり、町耕地係・地元地権者とその後も協議を重ねた結果、この計画では圃場間落差が大きすぎ圃場整備効果が上がらない。水利上一部に無理が生じる。後世の削平により、遺構の残存状態が非常に悪く、表土(耕作土)直下で遺構が検出され工事により少なからず遺構が破壊される地区がある等の理由により、5276㎡について発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和59年９月10日から昭和60年２月18日まで実施した。調査にあたっては岡山県教育庁文化課、岡山県高梁地方振興局、北房町役場、北房町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大のご協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校教頭

北房町教育委員会

加戸　明　教育長

新田　昌　事務局長

井原隆志　庶務担当

岩崎仁司　調査担当

調査作業員

江川　多市　大塚　真一　奥山　三男　小林　正志　迫田　三郎　鈴木　安二

中川　金市　西　一雄　西　春雄　坊　正男　本城　堅固　山岡　熊夫

山本　豊　大恵　清子　大恵　澄代　大平　厚子　鈴木キヨコ　西　五枝

山本　ミネ

（アイウエオ順、敬称略）

要　望　書

山田圃場整備地区の設計・計画変更に伴う発掘調査について遺跡の発掘調査面積を増加してくださるよう懇願いたします。

このたび私たちの山田地区圃場整備に伴います遺跡の発掘調査につきましては格別のご配慮により圃場整備が計画どおり推奨しており深くお礼申し上げます。

整備区域にあります遺跡については貴重な文化財であると認識いたし盛土により遺跡を保存するように設計協議を重ねましたが、下記の理由により計画変更の必要性が生じてまいりました。

(1)　圃場間の落差が大きすぎて圃場整備効果が少ない。

(2)　水利関係に一部支障がある。

(3)　換地がスムーズにできない。

(4)　圃場整備の目的の一つである農作業の機械化について意義の薄れてくる水田がある。

(5)　盛土に用する土量が多量で準備できない。

以上のほか多々の問題があり、地区内の人間関係に支障をきたすような現状でありますので設計計画を一部変更してくださるようよろしくお願いいたします。

昭和59年12月12日

北房町長
北房町教育委員会教育長　殿

山田地区圃場整備推進委員長
開　田　佐　一

日　誌　抄

以下、発掘調査の経過については日誌抄により追っていきたい。

昭和59年

9月2日　G調査区立ち合いにより柱穴検出、調査体制を整える。

9月10日　G調査区より調査開始。

9月23日　設計変更されたF調査区を発掘調査する。ほとんど遺構なく2日で調査終了。

11月1日　発掘機材搬入、B地点より調査を開始する。

11月15日　文化庁より伊藤技官、岡山県教育委員会より光永主事現場視察のため来跡。

11月19日　E調査区の発掘開始。

12月11日　E調査区で線刻埴輪片出土。
岡山県教育委員会文化課岡田主査来跡。

12月12日　圃場整備組合役員・建設課と圃場整備と文化財保護について話し合いを行う。

12月13日　岡山県教育委員会文化課河本課長補佐、遠藤主事来跡。建設課・教育委員会事務局と圃場整備文化財の保護・保存と発掘調査について打ち合わせを行う。

12月15日　E調査区遺構掘り下げ、北側落ち込み部分を掘り下げる。

昭和60年

1月7日　作業員5名増員。B調査区斜面堆積層の掘り下げ開始。

1月11日　E調査区遺構検出状況写真撮影。

1月14日　C調査区重機により表土排土。

1月17日　A・B調査区調査終了。清掃後写真撮影。
昼からD調査区へ移動。

1月18日　D調査区はほとんど遺構なく、C調査区の造成土一部排土開始。

1月22日　D調査区遺構掘り下げ。C調査区遺構検出。

1月25日　C調査区遺構掘り下げ開始。

1月29日　C調査区全景写真撮影。発掘機材の整理。

1月31日　発掘機材を谷尻遺跡調査事務所へ運搬。

2月6日　E調査区の実測再開。

2月7日　鎌木先生・水内先生・河本課長補佐来跡。専門委員会開催。

2月9日　岡山県古代吉備文化財センターで遺物整理・報告書について打ち合わせを行う。

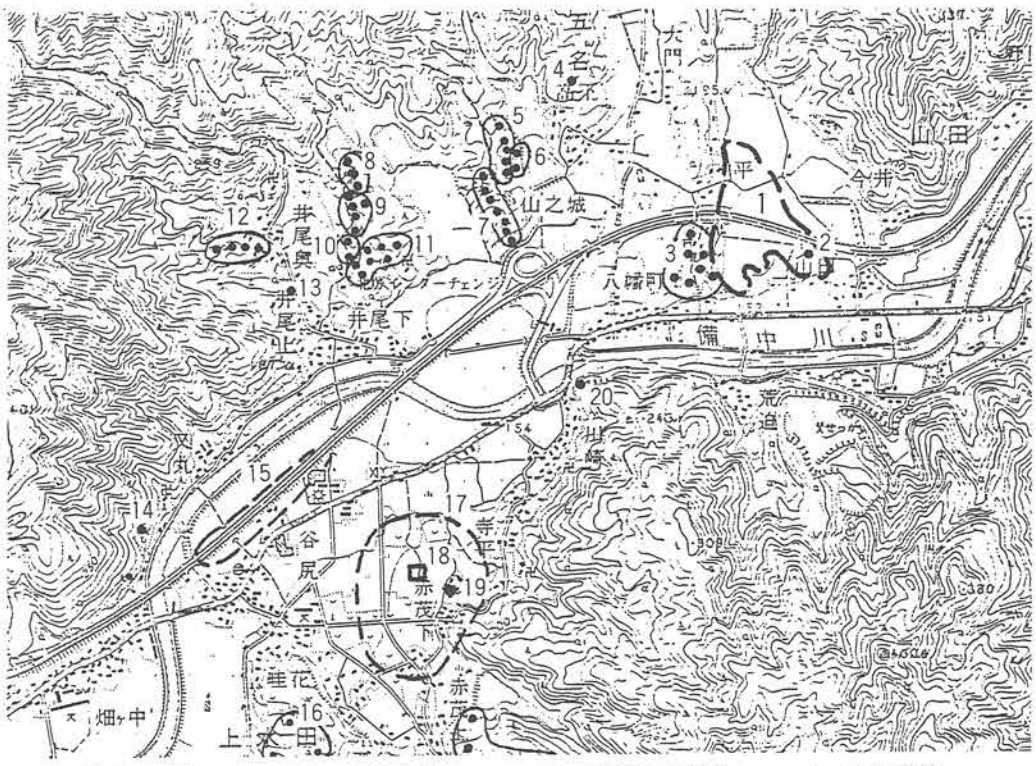
2月13日　土壙墓出土の人骨を無縁墓地に埋葬する。

2月18日～図面及び遺物の整理を随時行う。

第３章　　発掘調査の概要

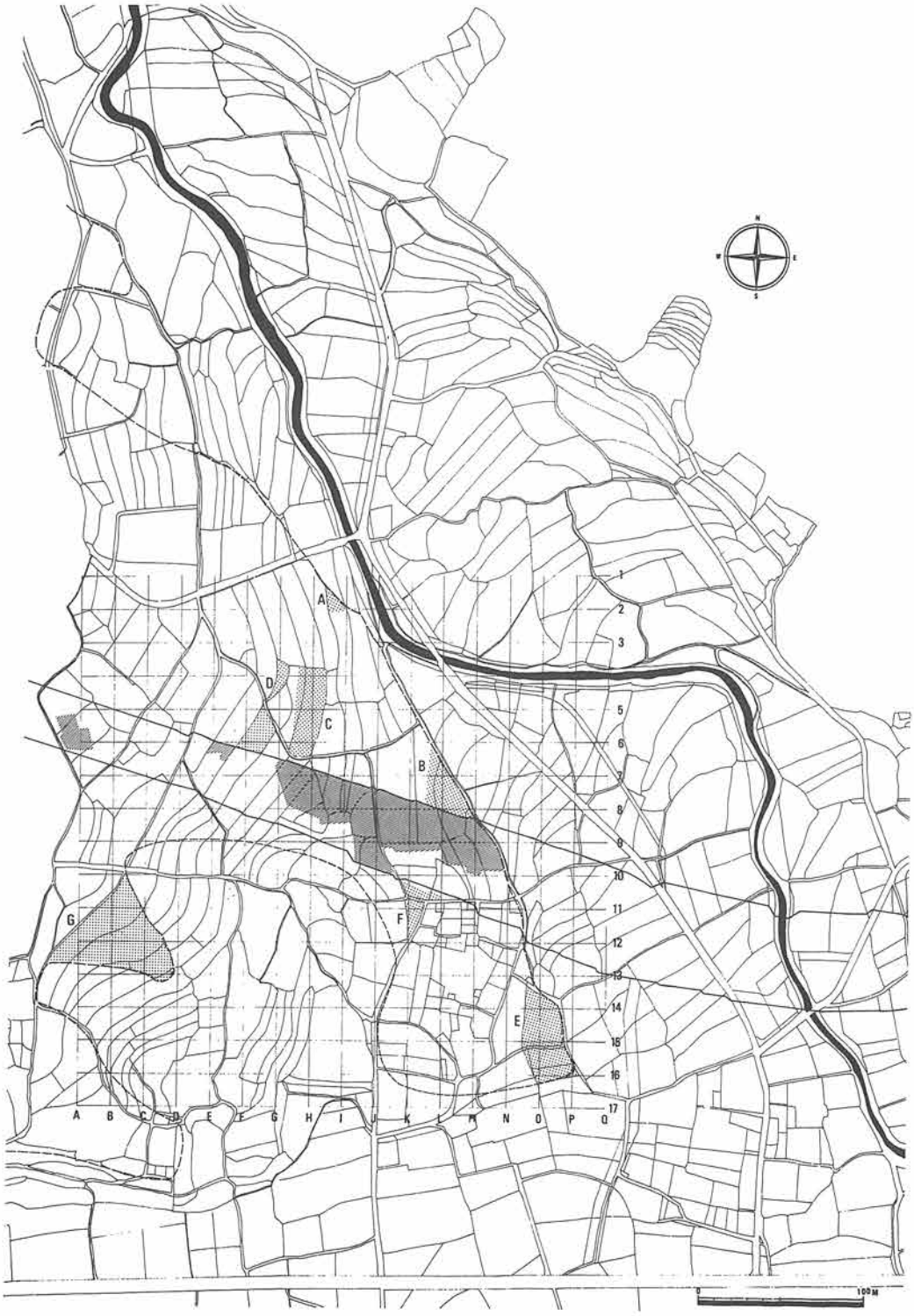
第１節　　遺跡の位置と現状

備中平遺跡は上房郡北房町山田に所在する。北房町阿口を源とする備中川は上水田で中津井川と合流し東流して落合町で旭川に注ぐ。この備中川により開析された上水田一帯の平野は、山田付近において南からの急峻な丘陵と北から延びる低丘陵によって狭くなっている。この低丘陵上には８基の古墳からなる八幡古墳群が点在し、一部には鉄滓の散布が見られる。この低丘陵から東へ低位台地が数本延びており、東側を小河川の開田川が備中川に注ぎ込んでいる。備中平遺跡はこの低位台地上に広がっており、南端部には山田古墳が所在している。現在、この一帯は大部分が水田であり、一部畑地・民家及び墓地となっており、現集落は低丘陵よりにある。この低位台地の中央部を南北に分断するように中国縦貫道が走っている。



１．備中平遺跡	２．山田古墳	３．八幡山古墳群	４．大塚古墳
５．高下古墳群	６．広高下古墳群	７．山之城古墳群	８．長そね古墳群
９．赤羽根古墳群	10．東観現寺古墳群	11．観現寺山古墳群	12．国重古墳
13．塚の峠古墳群	14．又丸古墳	15．谷尻遺跡谷尻地区	16．畦の山古墳群
17．谷尻遺跡赤茂地区	18．英賀廃寺	19．赤茂瓦窯跡	20．地蔵ケ淵洞穴遺跡

第３図　備中平遺跡周辺遺跡図（1/25000）



第４図　調査地点位置図（1/4000）

第２節　調査の方法と概要

発掘調査は、確認調査の結果をもとに、切土により消滅する地点とし、調査の都合上、北よりＡ～Ｇ区として調査を実施した。

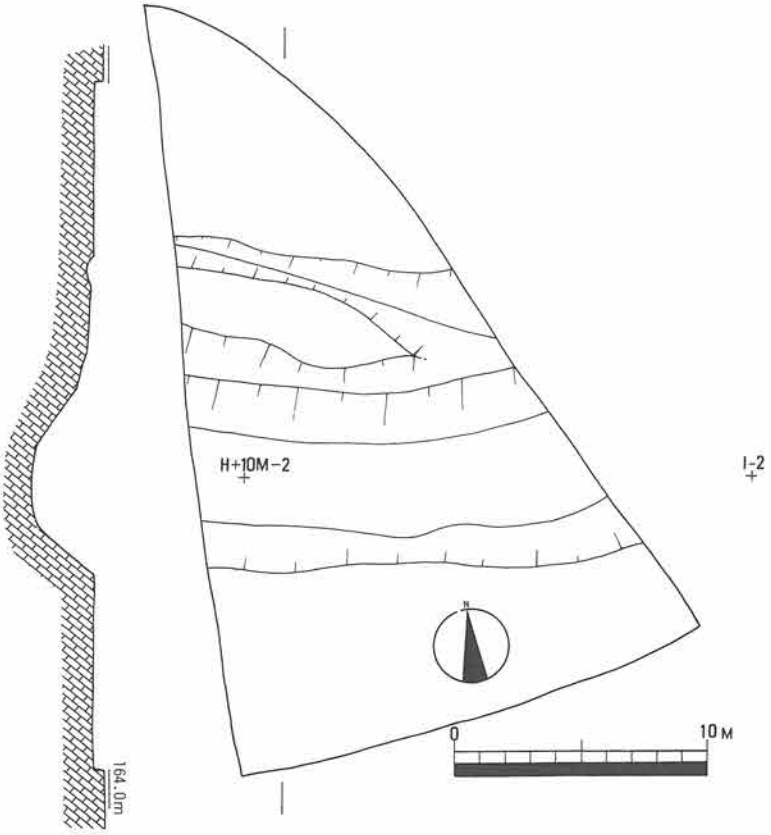
各地点ともたび重なる削平により表土直下より遺構が検出され、残存状態は悪く遺物もあまり検出されず、造成土中から少量検出されただけである。

以下、各調査区ごとに概略を記す。

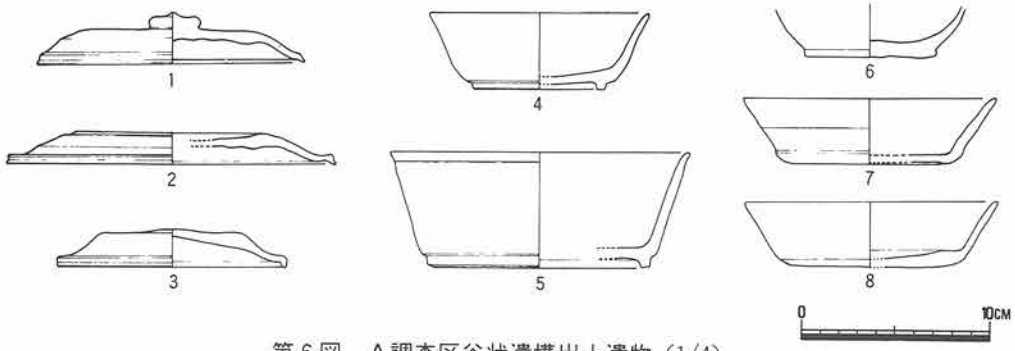
Ａ調査区（第５・６図、図版２－１）

当調査区は想定される遺跡の北東端に位置し、調査区の北及び東側の水田は当調査区より１ｍ低い位置にある。確認調査において斜面堆積層を検出したとして報告された地形を追う形で調査を進めた。その結果、斜面堆積層と考えられていたのは西からの小さな浅い谷の南肩であり、東側遺跡端部の斜面堆積層は以前に掘削されて検出できなかった。谷は幅2.7ｍ、深さ1.5ｍを測る。他に遺構は検出されなかった。

遺物は、谷状遺構から須恵器片及び土師器片が出土した。１～３は須恵器の杯蓋で宝珠のつ



第５図　Ａ調査区全体図（1/150）



第６図　Ａ調査区谷状遺構出土遺物（1/4）

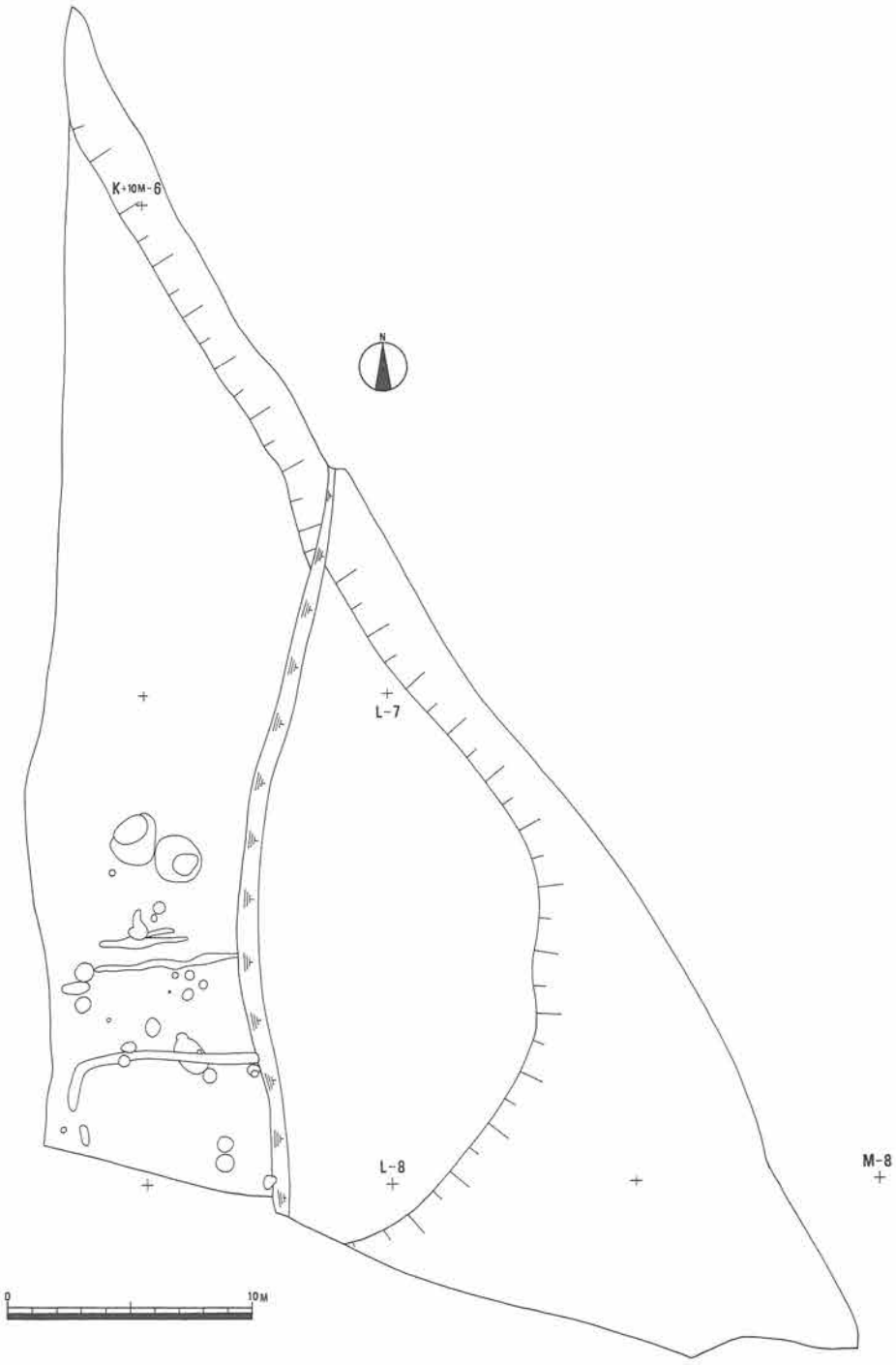
まみの付く１、と付かない２・３、がある。４・５は低く細い貼り付け高台が付く須恵器の杯で、５は焼成が非常によく表面に自然釉が付着する。６・７・８は土師器の杯で直線状に立ち上がり、端部は丸くおさめている。遺物は古墳時代～中世にかけてのものが出土しているが、奈良時代後半～平安時代にかけてのものが大部分であった。

Ｂ調査区（第７・８図、図版２－２）

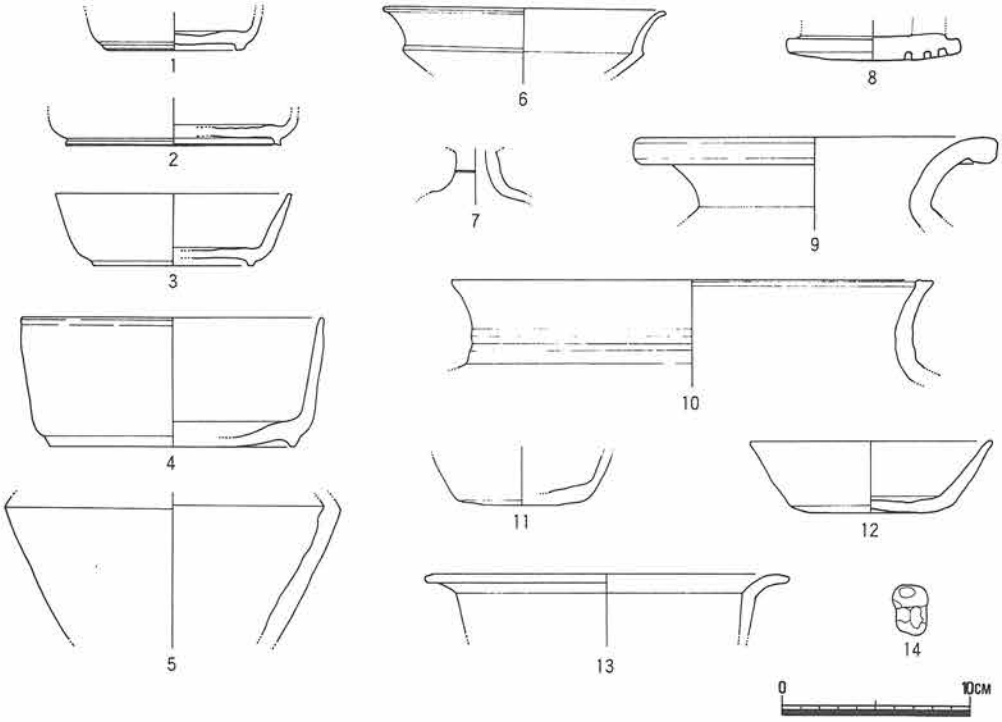
縦貫道の北にあたり、遺跡の東端部である。縦貫道部分は前々回の発掘調査で古墳時代の遺構遺物を検出している。当調査区では前回調査で検出された端部地形を追うとともに遺構の北の広がりを確認した。

調査区は２枚の水田にまたがっており、東側の水田は西より約１ｍ低く、調査区東隣の水田はさらに２ｍ下に位置する。調査区東半部分は耕作土と、地山の間に淡黄灰色粘質土が堆積しており、地山はゆるやかに東に傾斜していた。遺構はまったく検出されず東側端部において斜面堆積層を検出したのみである。斜面堆積層はこの部分ではごく薄いものであった。しかし西側の水田は耕作土直下で地山に達し、東南からの斜面堆積層が続いていたほか、地山上面において柱穴・土壙・溝を検出した。

各遺構とも削平のため残存状態が悪く、建物としてまとまった柱穴もなく、土壙もくぼみ状を呈するごく浅いものであった。溝は暗渠排水と思われるもので、深さ２～３㎝と浅く東西方向に平行に延びている。遺物は遺構内からは小破片のみで実測できるものは皆無であったが、斜面堆積層からはかなりの量の須恵器片及び土師器片が出土したが、小破片で実測可能なものは数少なかった。１～４は低い高台を有する須恵器の杯でいずれも焼成がよく、４は外面に自然釉が多量に付着している。５は壺の胴部と思われる。６・７は須恵器の高杯で７はミニチュアを思わす小さなものである。８はこね鉢の底部で立ち上がり部分は残存していない。９・10はツボの口縁部である。９は「く」の字形に外反する端部を肥厚させるのに対し10はやや外反ぎみに立ち上がり端部を水平にする。11・12は土師質の杯で底部はヘラオコシしており、12は板目痕が残る。13は土師質の土鍋で全体に磨滅が著しく調整は不明である。14は土師質の土製品で円柱状に整形されており中央部はオサエ痕が薄く残る。



第７図　Ｂ調査区全体図（1/300）



第８図　Ｂ調査区斜面堆積出土遺物（1/4）

Ｃ調査区（第９図、図版３－１）

縦貫道の北、前々回の調査で建物群等を検出した地区の北西側に位置する。

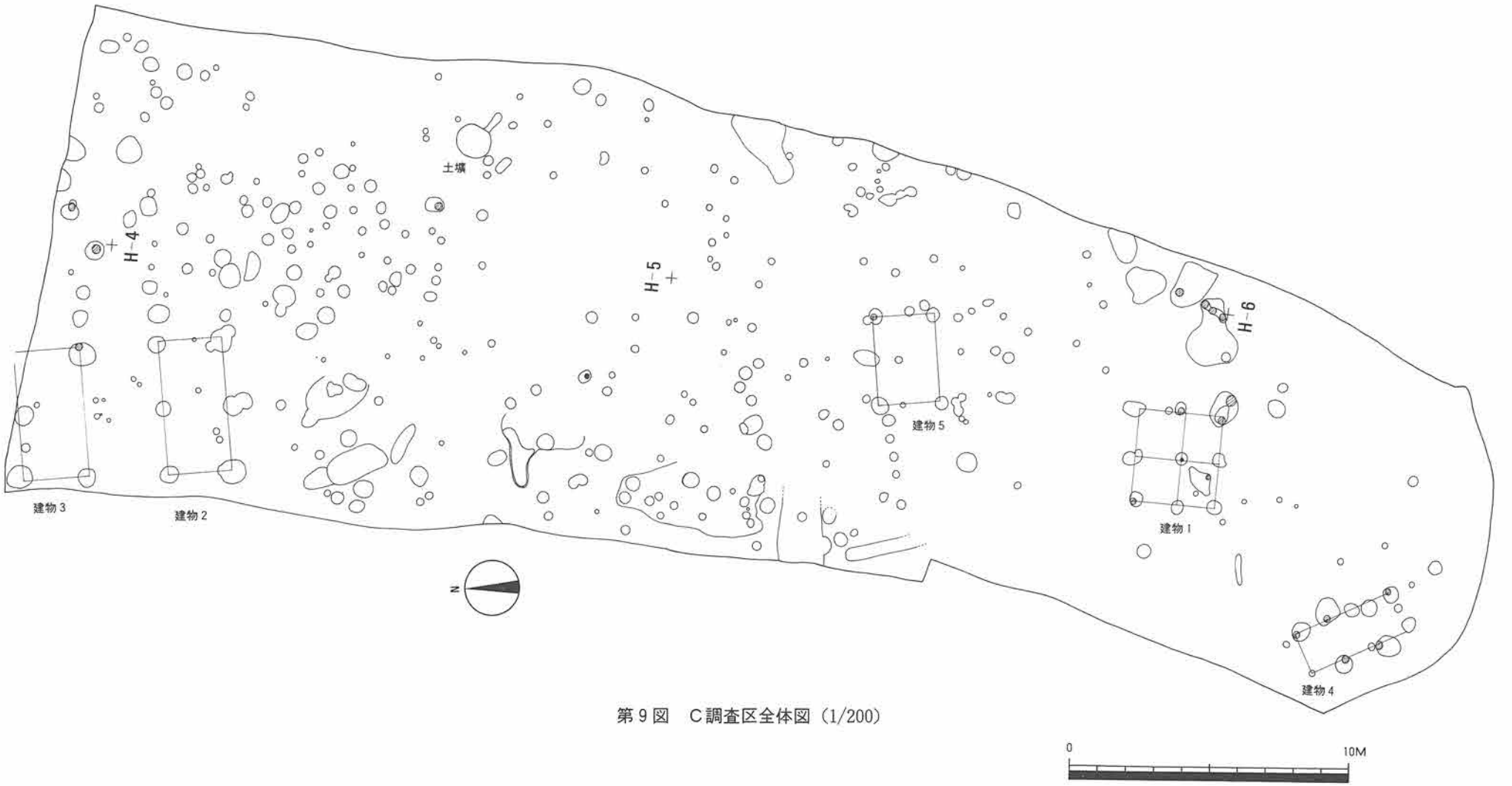
調査区は水田２枚にまたがる。いずれの水田も耕作土下には薄い淡黄灰色の粘土層が堆積しておりこの粘土層直下で地山に達する。遺構はすべて地山上面で検出したもので、この薄い粘土層には現代遺物が混在しており昭和初期の造成土と思われる。

遺構は地山上面で検出したが地山はすでに削平されており残存状態はあまり良くない。検出遺構は建物５棟、土壙１基のほか多数の柱穴を検出した。遺構密度はＥ調査区と並んで今までに調査された中でもっとも濃い。このこととほかの調査区の状況を考えれば、台地上全域に粗密の差はあるがかなりの遺構が存在したものの削平によりほとんど消滅したと思われる。

建物１（第10図、図版３－２）

調査区南より、建物４の北東５ｍに位置する２×２間のややいびつな総柱の建物である。規模はほぼ1.5ｍ等間で、柱掘り形は直径40～50㎝の円形を呈し、深さ10～30㎝を測り、掘り形に比べ柱間距離の短い建物である。遺物は甑片と須恵器の杯片が数点掘り形から出土したが小破片で図化できなかった。

主軸はＮ－５°－Ｗを示す。時期は奈良時代と考えられる。



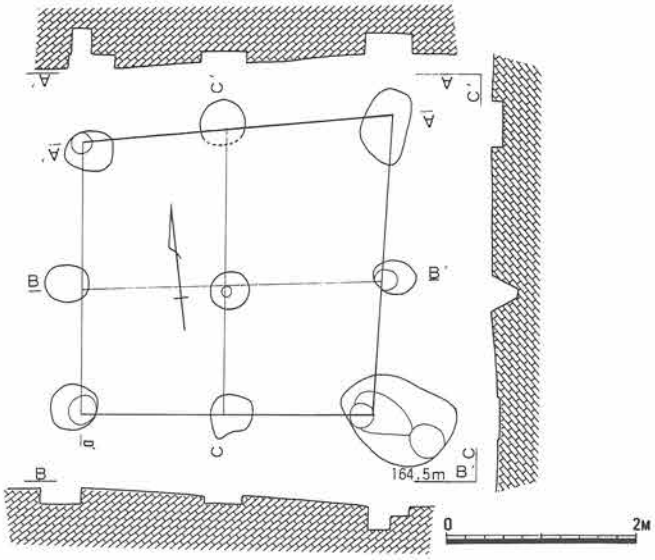
第9図　C調査区全体図（1/200）

建物２（第11図）

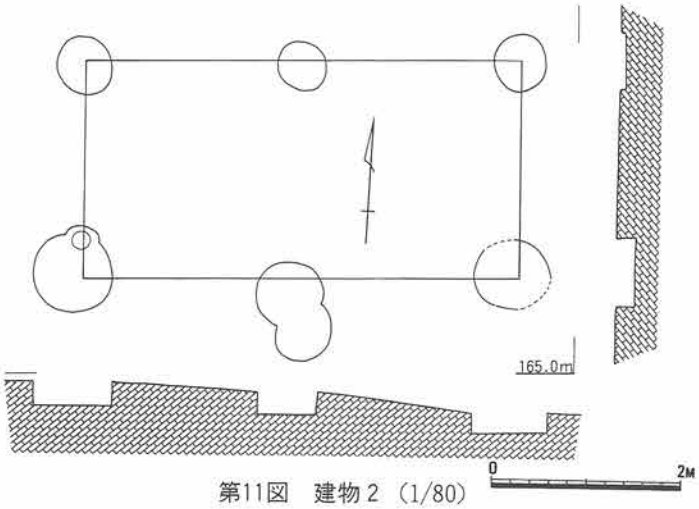
調査区の北西隅に建物３と並んで検出した。桁行２間、梁行１間の建物である。規模は桁行4.6m、梁行2.3mを測る。掘り形の平面形は50～60cmの円形を呈し深さ約20cmを測るが、北東隅の柱は削平のため５cmの深さしか残っていなかった。遺物は柱穴から数片出土したが図化できるものはなかった。時期は奈良時代と考えられる。

建物３（第12図）

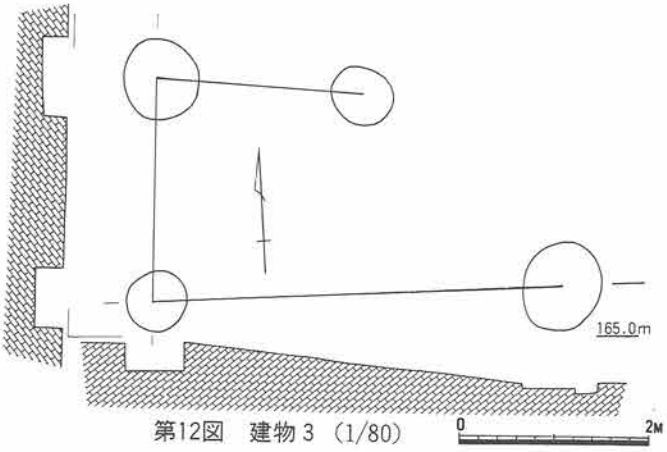
調査区の北西隅に検出した建物で北側が調査区外のため北東隅の柱は検出できず、また東へ行く程、地山が下がるため東側にまだ伸びる可能性があるが、東西方向２間、南北１間分検出した。規模は各柱穴間とも2.1mを測る。柱掘り形は60～90cmの円形を呈し、深さ30cmを測るが、南東隅の柱は削平のため約５cmの深さしか検出できなかった。遺物は土師器片が数片出土したのみで、時期は決定しがたいが隣接する建物２と規模が等しく、併設されて



第10図　建物１（1/80）



第11図　建物２（1/80）



第12図　建物３（1/80）

いたと考えられる。

建物４（第13図、図版4-1）

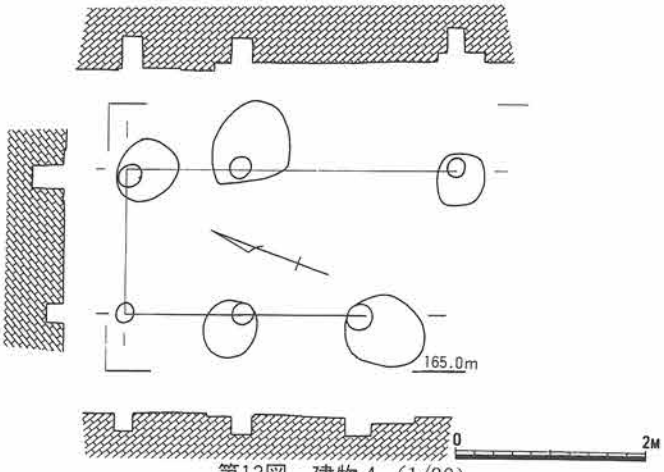
調査区南端部で検出した１×３間の建物である。規模は桁行1.2m等間、梁行1.5mを測る小さな建物である。掘り形の平面形は60～80cmの円形ないし楕円形を呈し、削平のため数cmしか検出できなかったがほとんどの柱穴で直径約25cmの柱痕が検出され、この柱痕から建物が確認された。遺物は各柱穴とも検出されなかった。

建物５（第14図）

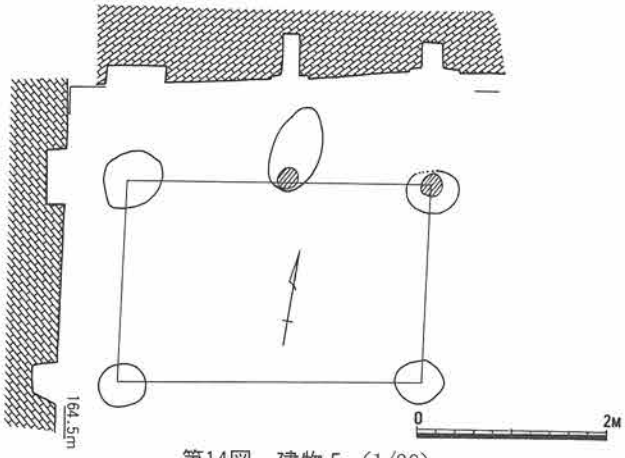
調査区中央部、建物１の北約８mで検出した１×２間の建物である。南側中央の柱は検出できなかった。規模は桁行3.20m、梁行2.10mを測る。掘り形の平面形は約50cmの円形を呈し、深さ20cm弱だが一部削平の為数cmのものもある。柱痕の認められるものもあった。

土壙１（第15図）

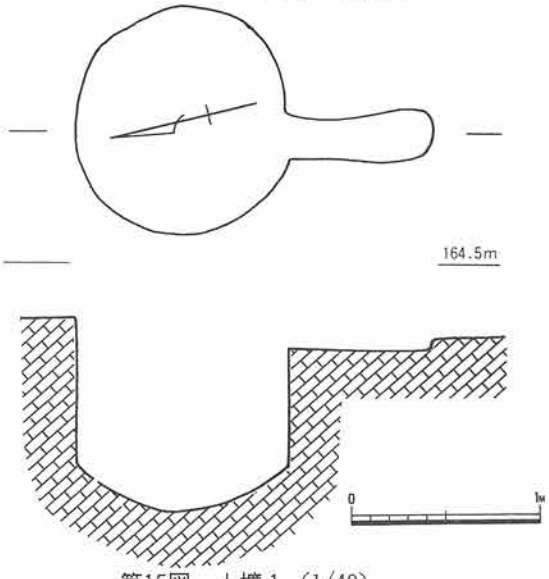
建物２の南東７mの位置で検出した土壙である。径1.2mの円形を呈する部分と幅20cm程の溝状の部分からなる。暗黒灰色土で埋まっており切り合いは不明である。



第13図　建物４（1/80）



第14図　建物５（1/80）



第15図　土壙１（1/40）

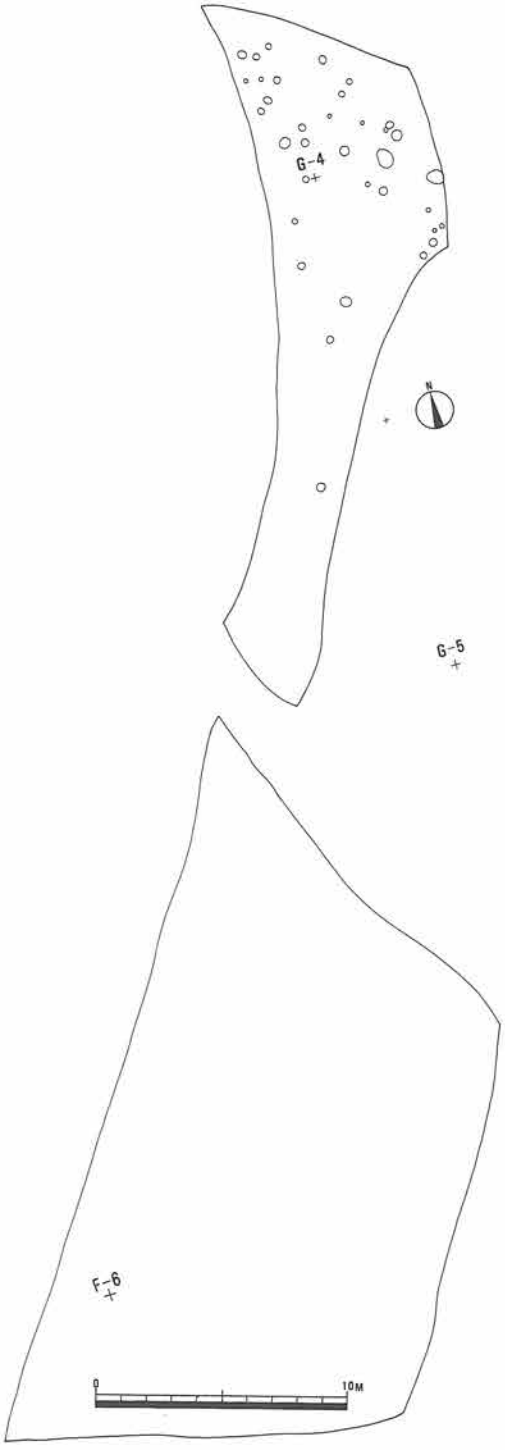
D調査区（第16図）

C調査区の西10mに位置し、C調査区より約1m高くなっている。調査区は2枚の水田からなり北側の水田は耕作土直下で地山に達するが南側の水田は、耕作土と地山の間に厚さ約60cmの淡黄灰色粘土が堆積していた。この粘土層から遺物は一点も検出されなかった。遺構は地山上面で検出したもので南側からは検出されず北側で柱穴30数個検出された。柱穴のほとんどが径20～30cmの小さなもので深さも削平のためか10cm程であった。柱穴は建物としてまとまるものはなく、北隅よりにまとまって検出した。遺物は柱穴内から数片出土しているが小片で図化できなかった。

E調査区（第17・23図、図版5-1）

遺跡の東南端、F調査区と山田古墳をはさんで反対側に位置する。北西から延びる低位台地の先端部にあたる。調査区の北及び東側の水田は約2m低い位置にあり、調査区南半は南へ向いゆるやかに傾斜している。

遺構はほとんど耕作土直下の地山上面で検出したが、部分的に地山と耕作土の間に黄灰色粘土の造成土が堆積している部分もあった。検出した遺構はほとんど調査



第16図　D調査区全体図（1/300）

第17図　E調査区全体図（1/300）

区北半に集中しており本遺跡中もっとも遺構密度が濃いがたび重なる削平のためか残りが悪く、柱穴等で深さ数cmしかない遺構も見られた。建物1棟、土壙7基、土壙墓6基、柱穴多数、風倒木痕（前回の確認調査で発掘調査されている）及び溜池（調査区北西隅で検出した溜池で、昭和初期まで使用されていたが水田化するため、埋められたものである。）

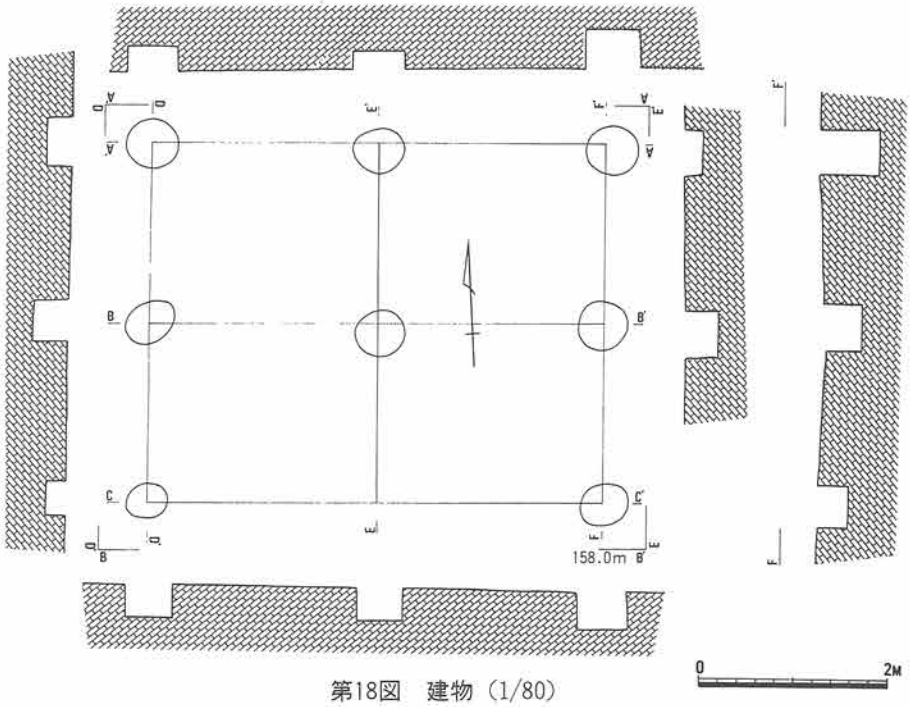
出土遺物は北側の落ち込み部分で現代遺物にまじって須恵器片、土師器片のほか備前焼、勝間田焼が出土した。落ち込み部分と地山上面で土師質の埴輪片が出土した。埴輪片はコンテナ箱に約半分の量が出土しているが、いずれも小破片の上磨滅が著しく復元できなかった。埴輪片の中に1点線刻文様のあるものがあった（第23図15）。

（確認調査で出土した埴輪の実測図を参考のため転載する。（第23図14））

建物（第18図）

前回の確認調査で一部確認されていたもので、調査区中央部西端で検出した梁行2間、桁行2間以上の総柱の建物である。南側中央の柱穴は検出できなかった。規模は東西4.8m、南北3.8mを測る。掘り形は径約50cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。出土遺物は掘り形から白磁椀、備前焼擂鉢の小片が出土した。

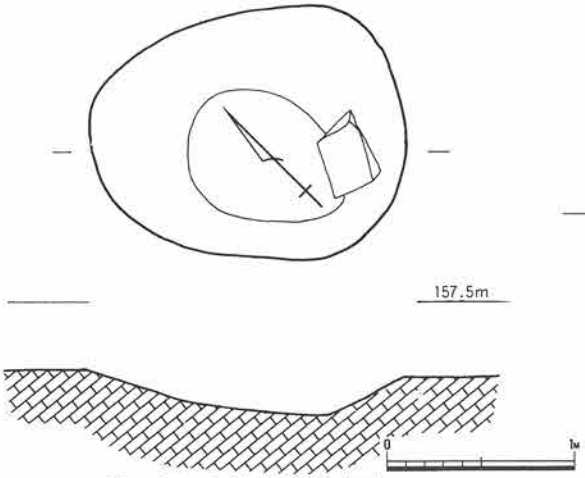
時期は中世と考える。



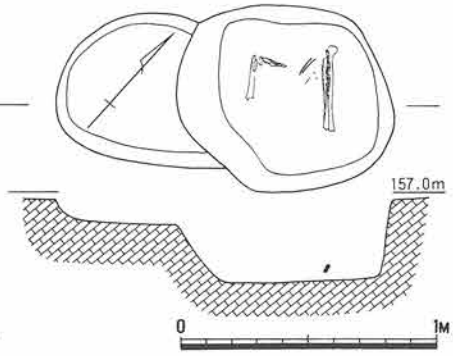
第18図　建物（1/80）

土壙墓1（第19図）

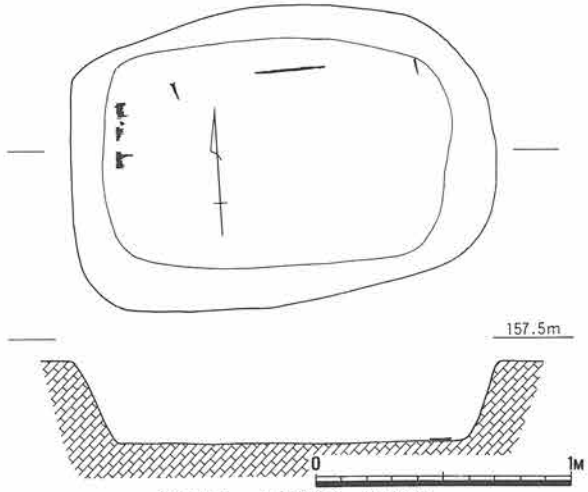
建物の東、Oライン上で検出した土壙墓である。長径130cm、短径110cmの楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。中から石臼が数片に割られた状態で2個体分出土した。



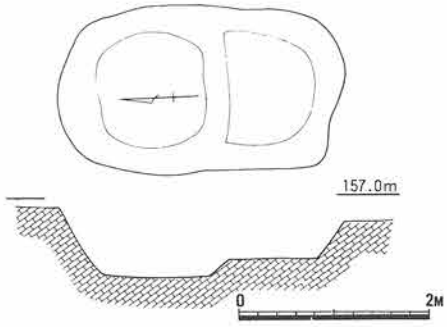
第19図　土壙墓１（1/40）



第20図　土壙墓２（1/30）



第21図　土壙墓３（1/30）



第22図　土壙４（1/80）

土壙墓２（第20図、図版５－２）

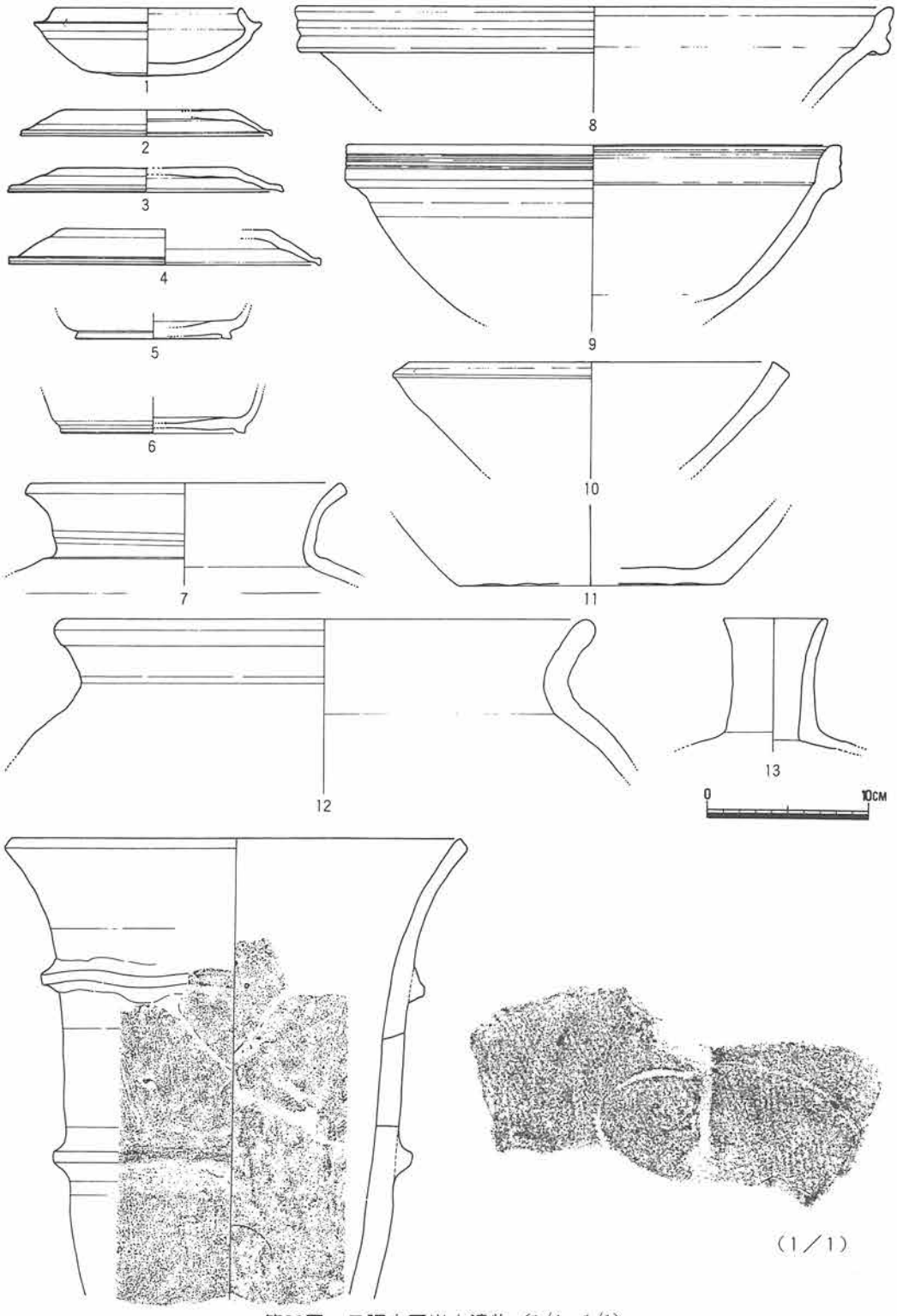
調査区北端部、溜池の傍で検出したもので２つの土壙が切り合った状態で検出した。検出平面形は南側の土壙は一辺60cmの方形を、北側のそれは径80cmの円形を呈する。出土遺物は北側の土壙底部より人骨の一部と鉄釘及び寛永通宝が検出された。

土壙墓３（第21図、図版６－１）

土壙１の南16mに位置する。検出平面形は、170×120cmの隅丸方形を呈し長軸はほぼ東西を向く。土壙底部には木棺の底板と思われる木質が一部残っていた。人骨等は出土しなかったが土壙１同様土壙墓と思われる。

土壙４（第22図）

調査区のほぼ中央部で検出した土壙である。300×175cmの長方形を呈し北半部が一段深くなっている。内部は円礫で上面まで埋まっていた。遺物は何も出土しなかった。



第23図　E調査区出土遺物（1/4，1/1）

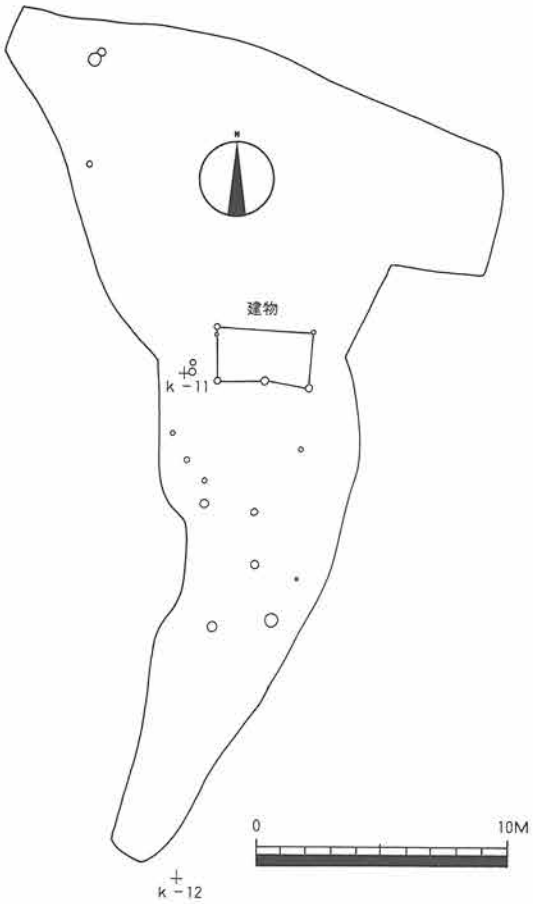
F調査区（第24・25図）

縦貫道の南、前回調査で建物群が検出された地区の南東側にあたり、B調査区と縦貫道を挟んで、相対する位置にある。調査区西南方向は大きく谷が入り込んでおり、南の迫田池へ向って地形が下がっている。

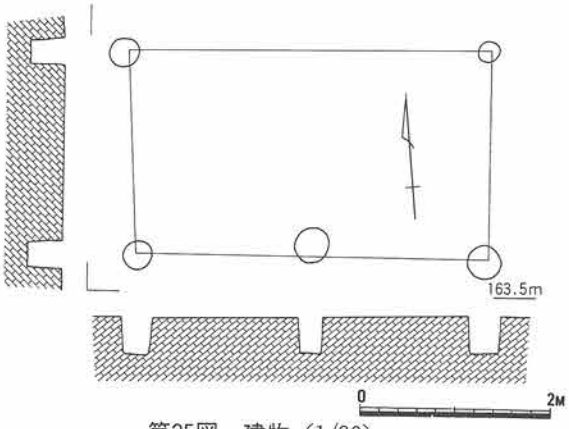
調査区の北側約⅓は削平で地表面が南側より約50cm低くほとんど遺構が検出されなかったが、南側において、残りが悪いものの、建物1棟、柱穴10数個を検出した。建物は桁行2間、梁行1間で、規模は前者が3.80m、後者が2.15mを測る。遺物は柱穴内より土鍋片が1点出土しただけである。他の柱穴からも土師片が数点出土したが、小破片で図化できなかった。

G調査区（第26図）

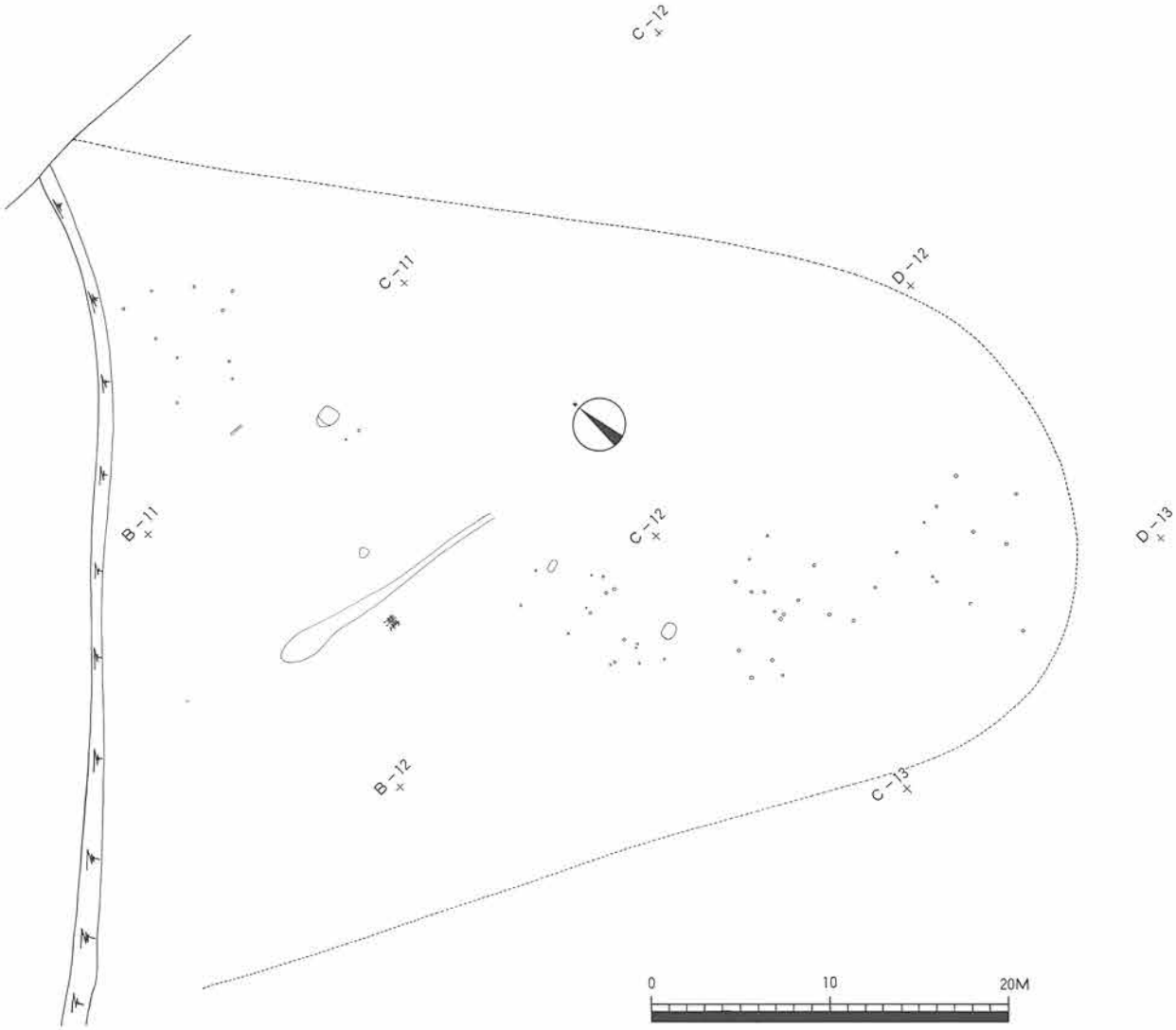
水田の形状からF調査区西南の谷を挟んで南東方向に低位台地の張り出しが想定され、確認調査で残りは悪いものの、柱穴が一部検出された地点である。昭和初期の造成土及び旧水田層が一部に残るが、それ以前の削平により地山上部はほとんど削平されており、遺構は地上上面において溝、柱穴及び土壙が検出されたが、柱穴はまばらで建物としてまとまるものはなかった。遺構の残りは悪く、柱穴にいたっては深さ数cmというものもあった。溝は暗渠排水と思われる幅50cm、深さ30cmで削平のため、14m以上検出できなかった。柱穴は直径15～20cmと小さい。遺構内に遺物はなく、時期は不明である。



第24図　F調査区全体図（1/300）



第25図　建物（1/80）



第26図　G調査区全体図（1/400）

第4章　ま　と　め

今回の調査は、調査面積5276㎡と広大なものとなったが調査区の約半数が遺跡の端部にあたり、その上たび重なる削平により各地区とも遺構の残存状態が悪く、遺跡の広がりは把握できたものの遺構があまり検出されず、遺跡の時代・性格等についてはあまり解明できなかった。ここではいままでの調査の結果を加えまとめとしたい。

備中平遺跡は、およそ65,000㎡におよぶ遺跡の規模をほこり、町内で2番目に大きい遺跡であると考えられる。備中平遺跡は、北から延びる低丘陵から東へ広がる低位台地上に位置する。この低位台地は3つの台で大きく4つに分かれており、いずれの台地上にも粗密の差はあるものの遺構・遺物が確認されている。南側の2つの低位台地は削平が著しく、ほとんど遺構は検出されないが、一番北側に位置する台地及び2番目に位置する、もっとも大きな台地上からは多数の遺構・遺物が検出された。前者は、前回の確認調査により全面発掘され、古墳時代の建物と、時期不明だが建物2棟検出されており、後者からは、前々回及び今回の調査で20数棟の建物などを検出している。遺構の残存状態が悪い上、遺物があまり出土していないので、時代決定は困難な面もあるが、以下時代順に説明を加える。

最も古い遺物は前々回の調査で出土した縄文時代早期の押型文土器片及び石鏃があげられる。しかしながら遺構が検出されておらず、今回の調査でも遺構・遺物ともに検出されなかった。さらに弥生時代と考えられる遺物は、各調査ともに検出されておらず、この地を継続的に利用しはじめるのは古墳時代になってと考えられる。

古墳時代になると、前回調査で住居址、土壙等検出されているが、まばらで遺物も少なく、斜面堆積層でも遺物出土量が少なく、台地上に数棟の住居址が散在していたと考えられる。その後、台地南東端には横穴式石室をもつ山田古墳や、低丘陵先端部には8基からなる八幡山古墳群が展開する。山田古墳の東側にあたるE調査区からは埴輪が出土している。

奈良時代になると、これまであまり検出されなかった遺構がこの時期になると各台地上のいずれでも検出された。特に最も北側の台地上からは建物2棟が、中央の台地上では前々回と今回あわせて20棟近く検出されている。出土遺物も「吉祥」の墨書土器をはじめ、大半が8世紀を中心とするものであった。これらの建物は残存状態があまりよくなく、時代決定は困難だが、包含層遺物のあり方などから大半の建物がこの時期に含まれるものとして大過ないであろう。

中世になると、建物・溝・土壙等検出されているが前代と比べ数は少なくまばらであり、以後近世になって台地上が水田化されるとともに山田古墳一帯が墓地化されていくものと思われる。

町内において同時代の遺跡として英賀廃寺、小殿郡衙及び中世建物群が検出された谷尻遺跡等との関連において、今後古代～中世のこの様な遺跡のあり方が解明されていくものと考える。

備中平遺跡航空写真

図版 1

図版２

１．Ａ調査区谷状遺構（北より）

２．Ｂ調査区全景（南より）

1．C調査区全景（北より）

2．建物1（南より）

図版 4

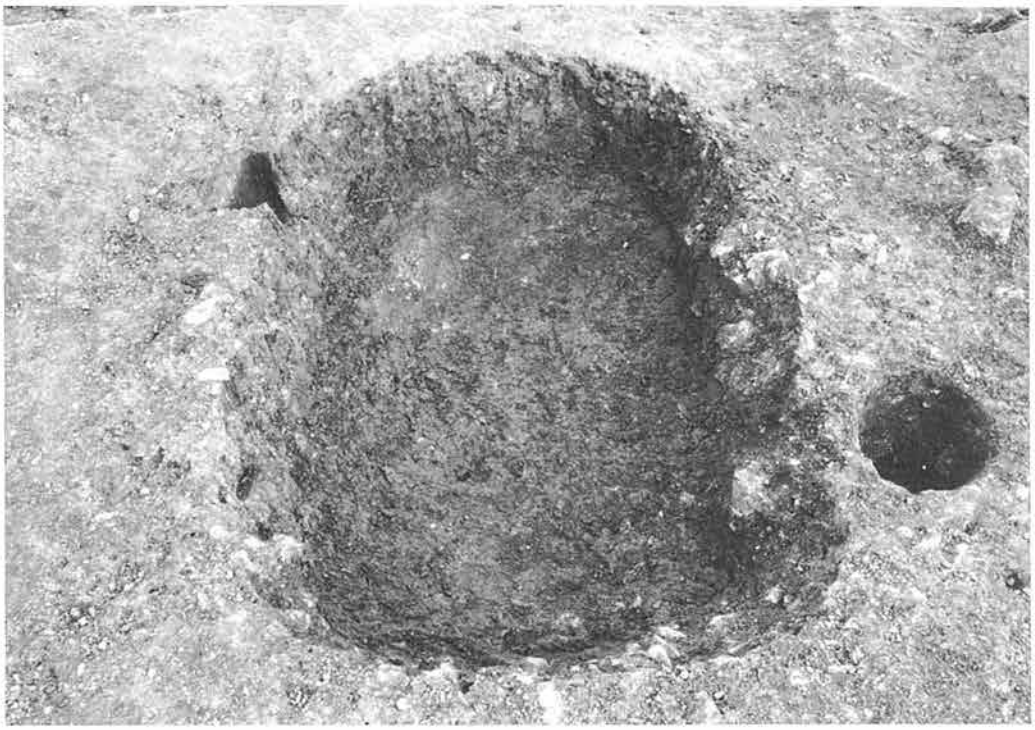
1．C調査区建物４（南より）

2．E調査区調査前全景（北より）

1．E調査区全景（東より）

2．E調査区土壙墓2

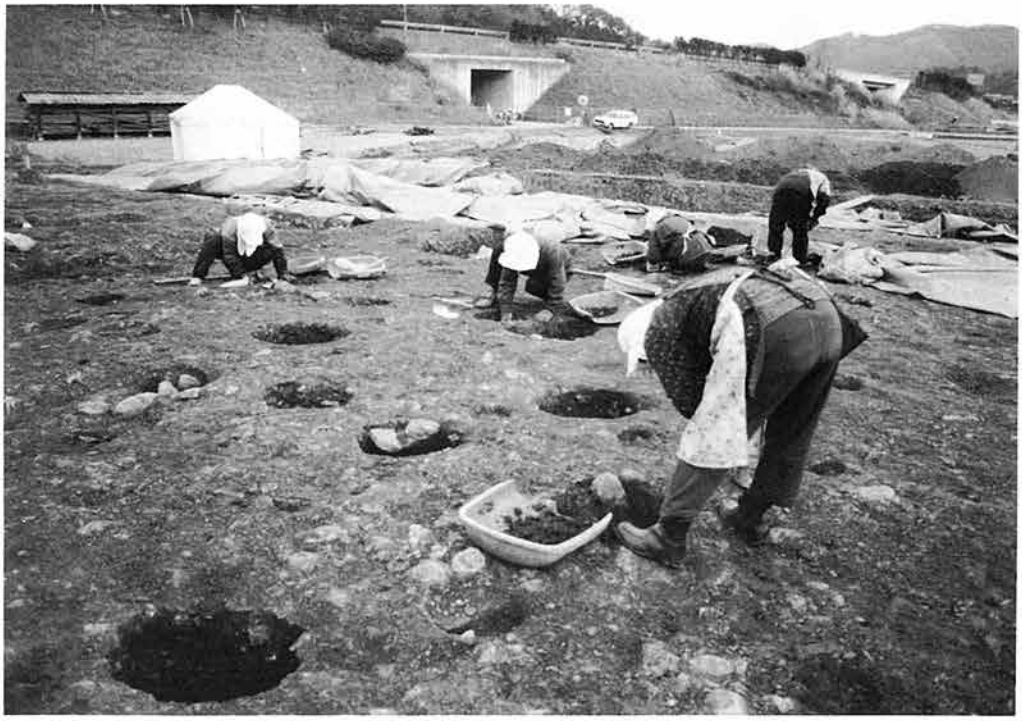
図版 6



1．E調査区土壙墓3

2．E調査区五輪塔集積地

1．A調査区調査風景



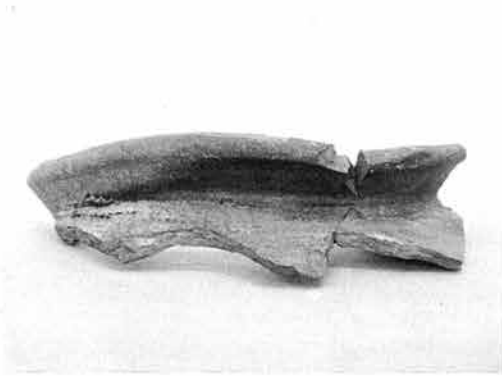
2．E調査区遺構掘り下げ状況

図版 8

A 調査区

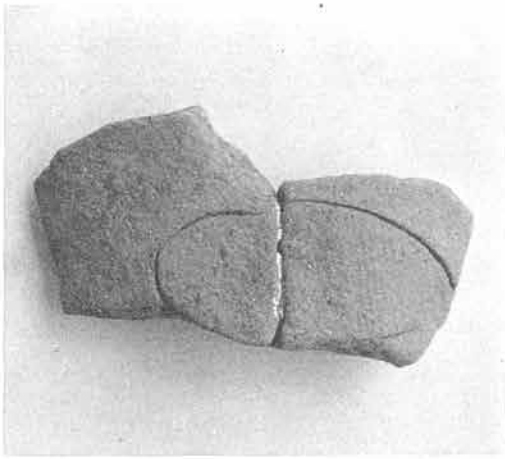
B 調査区

E 調査区



E 調査区

C 調査区



E 調査区

出土遺物

北房町埋蔵文化財発掘調査報告　5

備 中 平 遺 跡

昭和61年３月20日　印刷
昭和61年３月25日　発行

編　集　北 房 町 教 育 委 員 会
印　刷　西日本法規出版株式会社